

琉球大学学術リポジトリ

首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/941

首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察

西 村 貞 雄

A Study of the Direction of Ryu-chu
(carved dragon pillar) of the State chamber
Sadao NISHIMURA*

ABSTRACT

At the front of the state chamber is a unique grand staircase. It is spread out like an open fan with carved lions on the handrails, and the main pillars fixed with ryu-chu.

In this paper, I studied whether dai-ryu-chu (grand dragon pillar) on the staircase had faced to the front or had faced each other.

一、はじめに

首里城正殿の大龍柱については、首里城の象徴的な存在として多く語られて來た。また、それにまつわる話の中に、「明治12年より駐屯していた熊本鎮台分遣隊の憲兵隊長が彼の郷里に龍柱の移送を命じ、一個の龍の胴体が切断されたが、この憲兵隊長の急死のため、移送は行われず残り、その後両方の長さの均等を得るため完全な龍も切断した。」(首里城復元期成会報七号より)とある。この事によって胴体中央部がなくなった状態で大正、昭和にかけて建っていた事が、残された写真等によってわかる。しかし、向きについては、首里城正殿の修復に伴って、御庭に向いていたり、階段上の小龍柱同様に向き合わせになっていたりしていたので、その判断をくだす決め手を失っていた。復元に向けて、大龍柱の向きについては度々新聞紙上で論じられており、古老達の間でも語り草になっていた。

この稿では、資料に基づいて論じていきたい。

二、龍柱の形態と名称

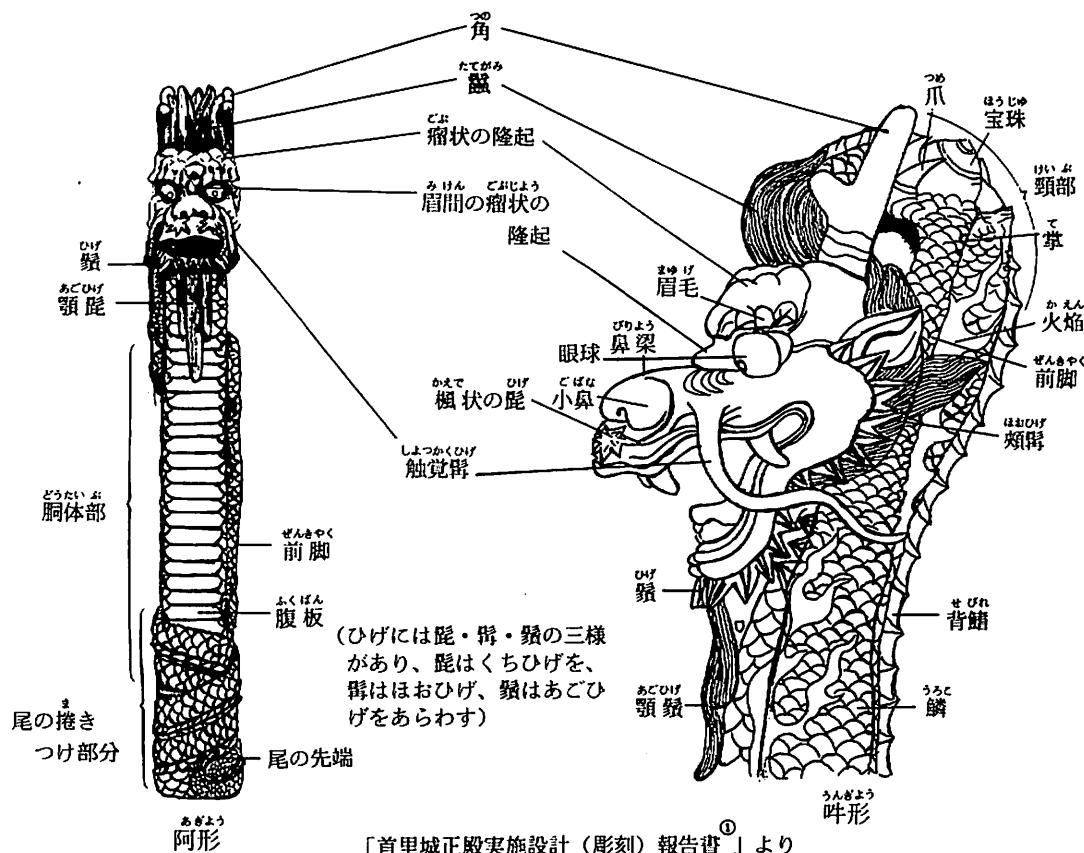
(この稿で使われている龍の名称)

首里城正殿には、龍が多く取り入れられている。この龍柱は、正面階段の左右に組まれた勾欄に配置された阿形(口を開けている)、吽形(口を閉じている)一対の龍である。

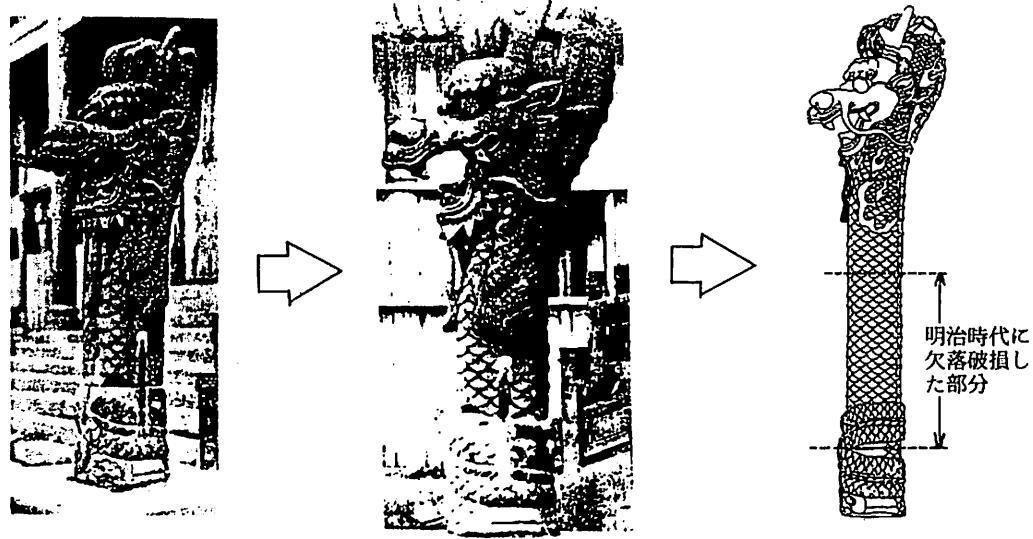
一般に中国や諸外国では、柱に巻き付いた龍はよく見受ける。しかし、この龍は、柱そのものが龍の胴体であり、とぐろを巻き、鎌首を持ち上げて身構えている姿を柱に見立てたものである。

睨みつけるような大きな目の顔から、盛り上げられた盤に添って頸が弧を描き、頬を引き付けて構えている部分が、鎌首に当たる。体の下方はとぐろを巻き、左右の脚は胴体に添って上と下に構えて威嚇している。脚もとぐろを巻いた尾も柱(胴体)に馴染ませている龍柱は、独自のものであり、首里城正殿の存在感を一層引き立てている。

* Department of Sculpture, Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.



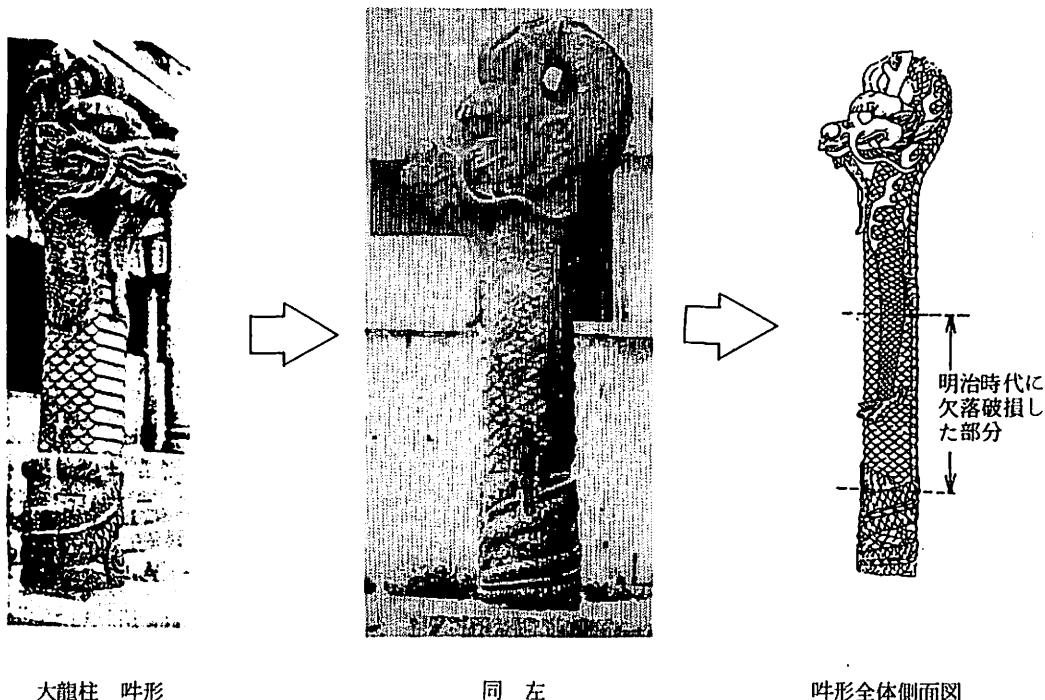
・大龍柱胴体破損と予想図



大龍柱 阿形

同 左

阿形全体側面図



『首里城正殿予備設計報告書「首里城正殿大龍柱（縮尺1/5）復元経過について』^②より

三、資料について

大龍柱についての資料には、絵図、写真、図面、木版画等が挙げられる。それらを基にして年代の古い順や、龍柱が正面を向いているか、向かい合っているかに分けて比較する。

◎絵図

- ・絵図は鳥瞰図や展開図として描かれ、大龍柱が向き合うかたちが多いが、正面向きの様に見えるかたちもある。

『首里城　正殿前城元仲秋宴設営絵図』^③

（尚敬王または尚穆王時代のものと推定される。尚侯爵家蔵）「沖縄文化の遺宝」より（絵図①）

『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』^④
(以下「寸法記」という) 1768年（尚穆17年）沖縄県立芸術大学蔵（絵図②）

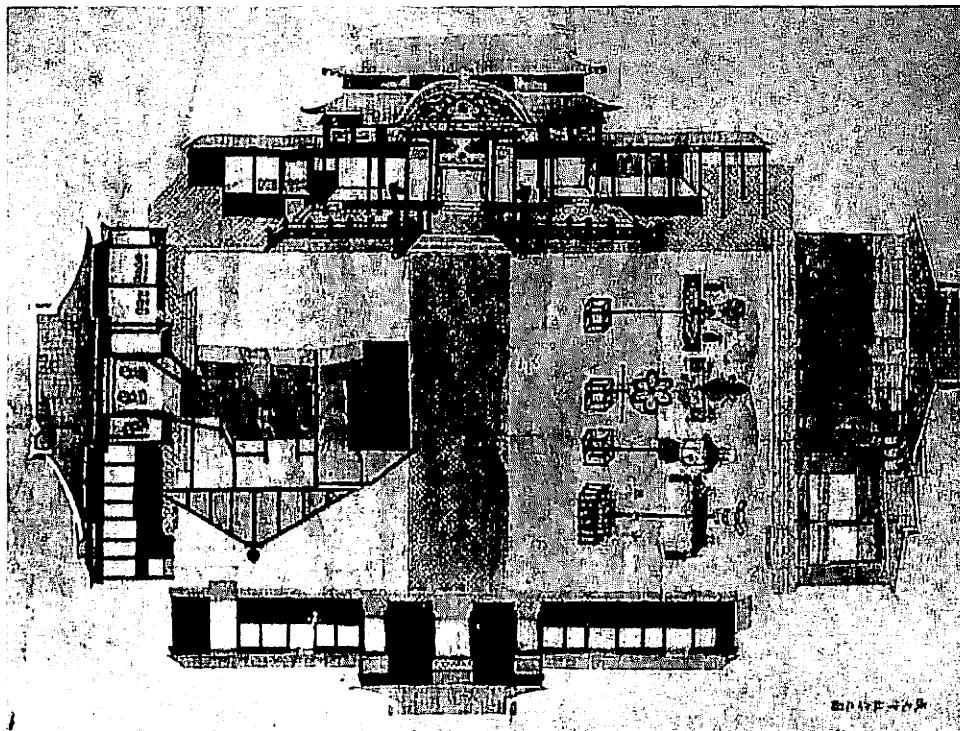
『首里那覇港図』（八曲屏風）^⑤
筆者不詳 19世紀 明治22年（1889年）
に新潟県の山口某が鹿児島で買い求めた、
という記録あり^⑥。沖縄県立博物館（絵図
③）

『首里旧城の図』^⑦

仲宗根真補筆 1894年（明治27年）
歓会門右脇に「沖縄分遣歩兵隊」の看板が
描かれている^⑧。沖縄県立博物館蔵（写真④）

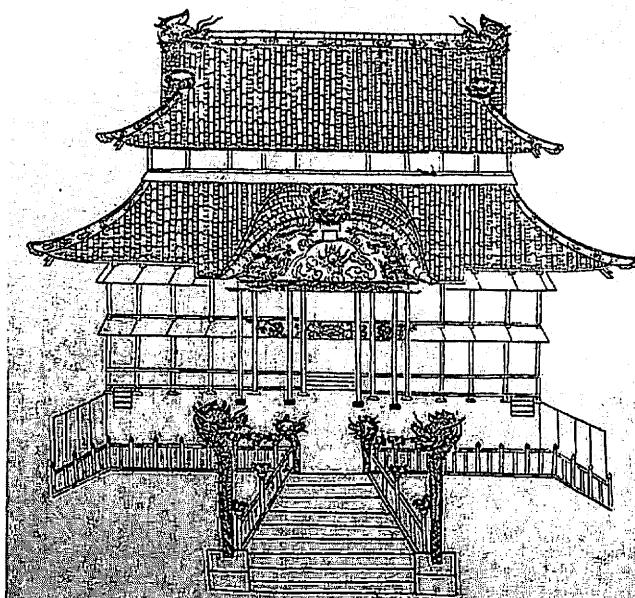
『首里城鳥瞰図』^⑨

「沖縄文化の遺宝」より（絵図⑤）



絵図① 「首里城 正殿前城元仲秋宴設営絵図」

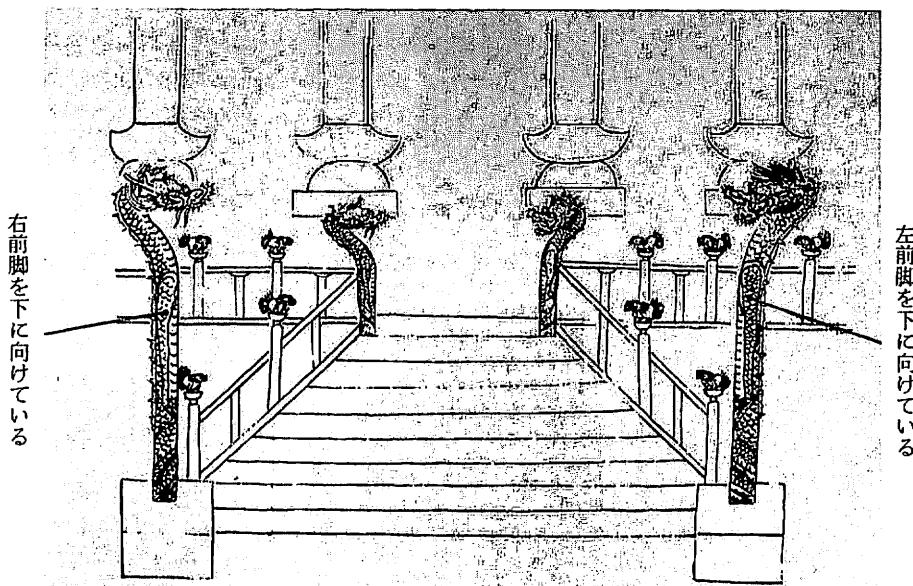
御庭を中心に、正殿、南殿、北殿、奉神門が
展開図で描かれている。大龍柱は向かい合う？



絵図② 「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」

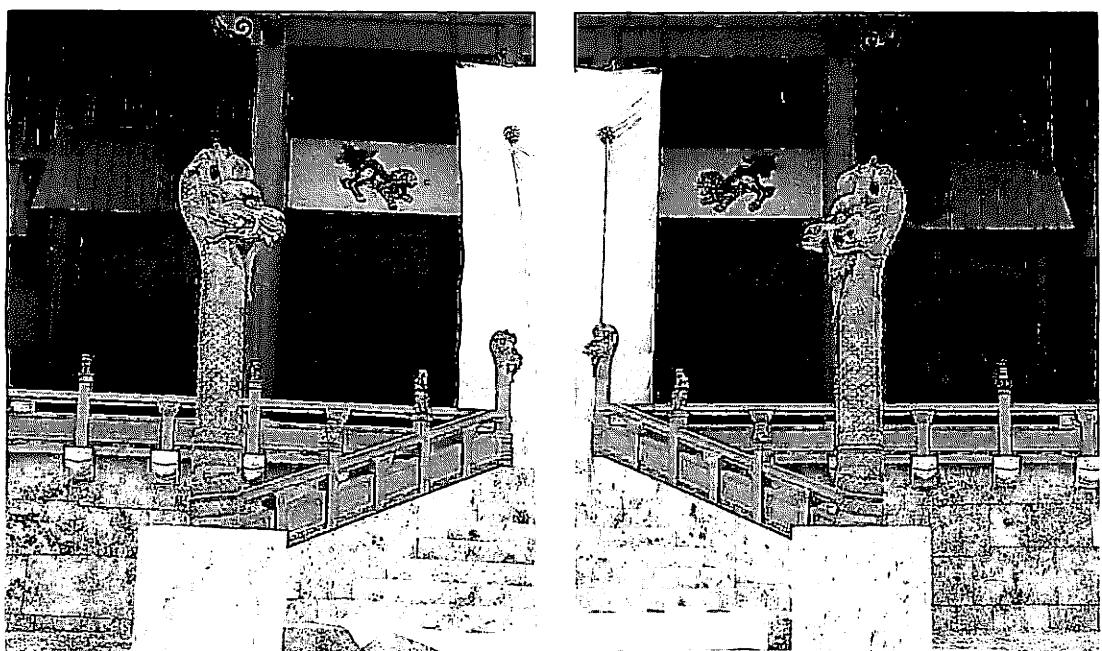
鳥瞰図的に描かれていて、正殿
の当時の雰囲気を伝えていると
思われる。
龍柱は向かい合う。

「寸法記」の絵図と平成の復元との比較

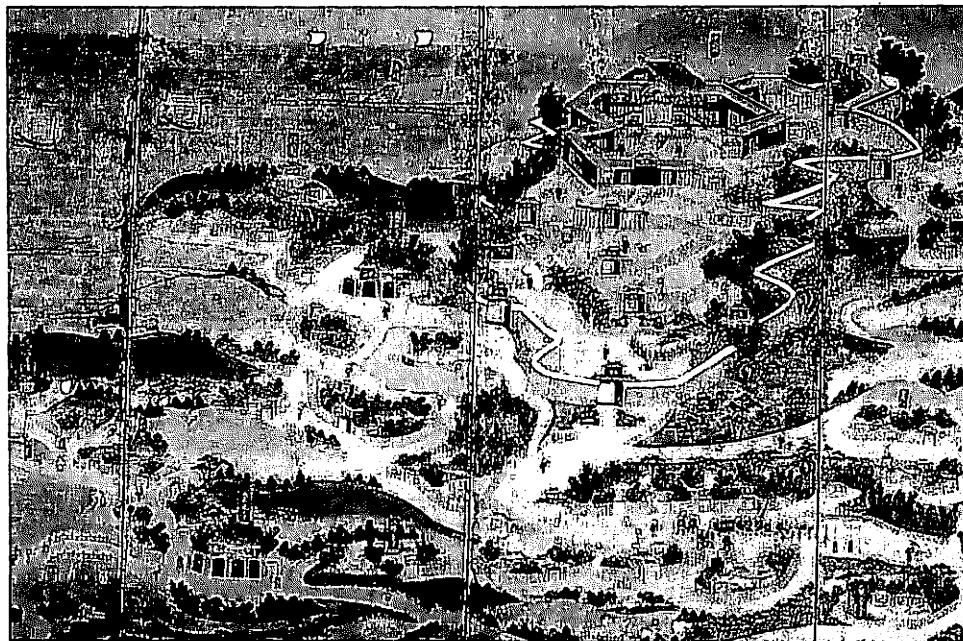


絵図②-1 「寸法記」の龍柱の絵図

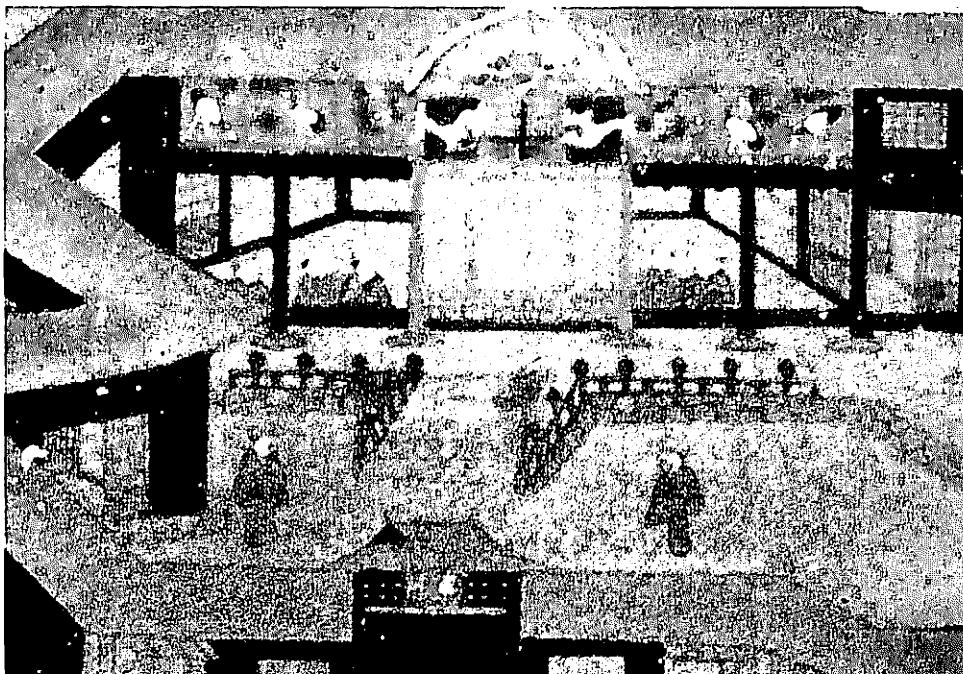
大龍柱、小龍柱とも、この方向からの脚は、
頭部・頸の位置にくるのが、本来の形状である。



平成の復元・龍柱



絵図③ 「首里那霸港図」（八曲屏風）筆者不詳 19世紀



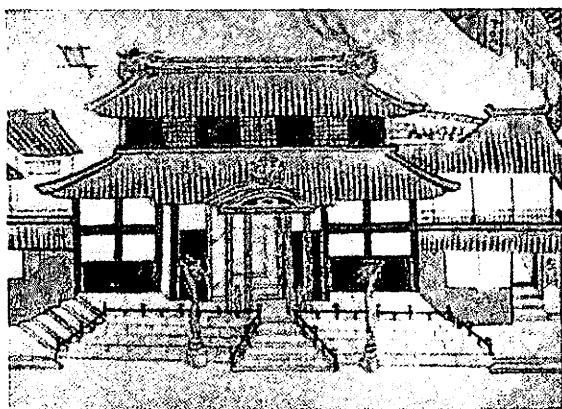
絵図③-1 「首里那霸港図」

正殿部分拡大。大龍柱は台座がなく、勾欄に組まれ、向かい合うかたちをとっている？ 小龍柱は描かれていない。



絵図④

「首里旧城の図」 仲宗根真補筆 明治27年



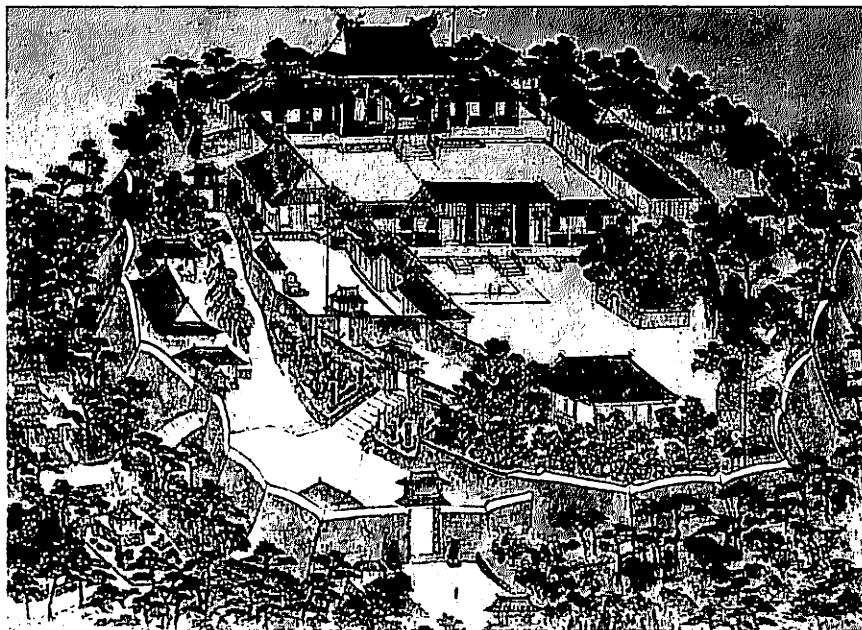
絵図④-1

正殿部分拡大。大龍柱は向かい合う。勾欄より離れた位置にある。

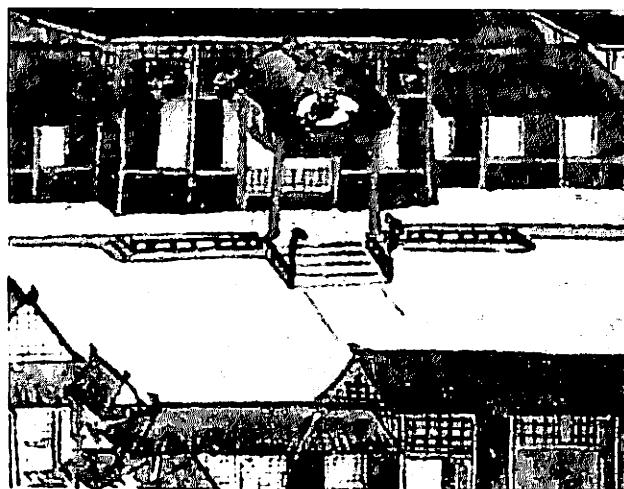


絵図④-2

歓会門部分拡大。右脇に「沖縄分遣歩兵隊」の看板があり、獅子の向きは、向かい合うかたちをとっている。



絵図⑤ 「首里城鳥瞰図」 「沖縄文化の遺宝」より



絵図⑤-1

正殿拡大。鮮明ではないが、大龍柱は正面に向っている様に見え台座はなく、勾欄に組まれている。



絵図⑤-2

歓会門拡大。獅子の向きが正面向き。

門衛舎と大龍柱の台座がないので、古い絵図と思われる。

◎写真

・正面を向いている大龍柱

『写真集 沖縄』^⑨（那覇出版社）

明治末撮影（写真①）

大龍柱の胴体中央部が無い状態でつながれている。

『沖縄文化の遺宝』^⑩（岩波書店）

1922年（大正11年）撮影（写真②）

小龍柱が無い。大龍柱の胴体中央部が無い状態でつながれている。

1924年（大正13年）撮影（写真③）

上記の写真と龍頭棟飾りのみ変わる。

大龍柱の全容が見える正面向きの写真（写真④）

平成3年、首里城正殿復元工事中に工事関係者に届けられた。

・向かい合う大龍柱

『琉球建築』^⑪（座右宝刊行会）

『琉球遺宝史』^⑫（成章館）

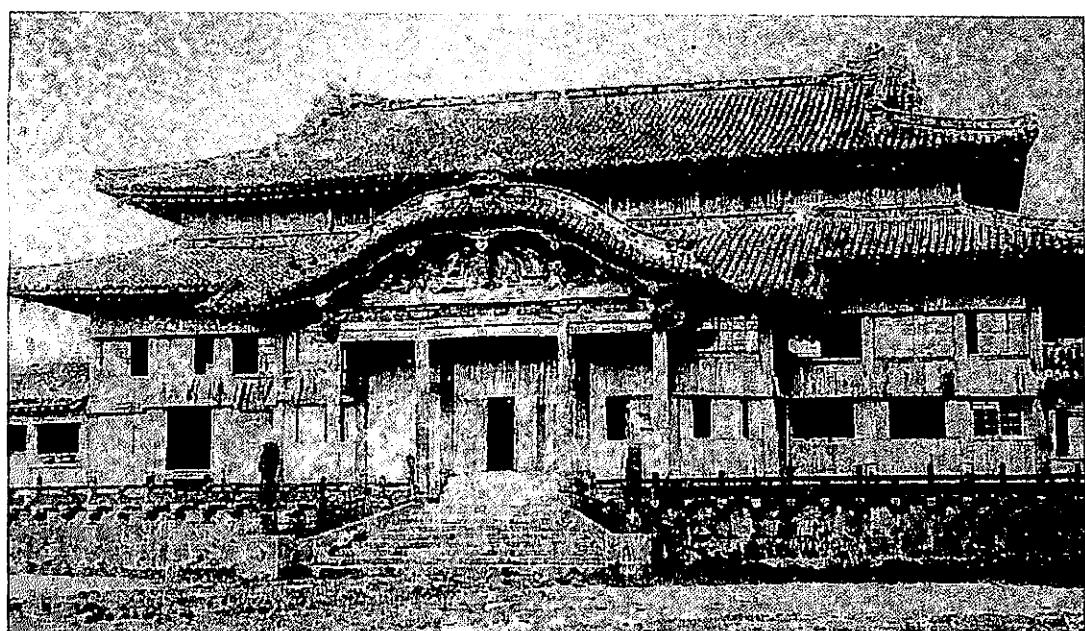
この二点は同じ写真（写真⑥）であり、大龍柱の横には灯籠がある。

『写真集 沖縄』^⑬（那覇出版社）

昭和の復元修理後 1935年（昭和10年）頃（写真⑥）

坂本万七遺作写真集『沖縄・昭和10年代』^⑭

（新星図書出版）（写真⑦）



写真① 明治末撮影 「写真集 沖縄」より

正面向きの大龍柱。胴体中央部は無く、つながれている。



写真② 大正11年撮影 「沖縄文化の遺宝」より

建物が大分いたんでいる。小龍柱がない。

大龍柱は、胴体中央部が無く、正面向きである。

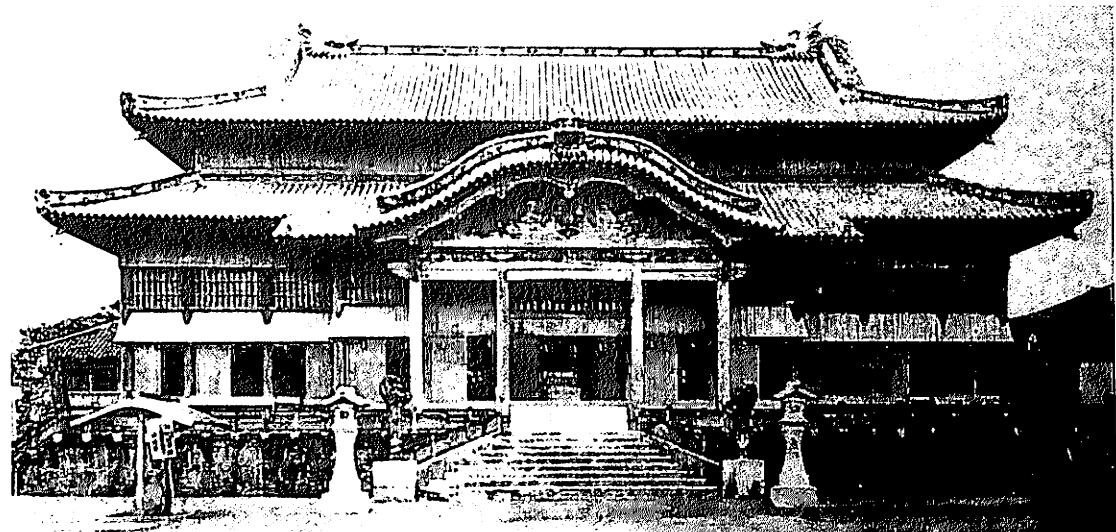


写真③ 大正13年撮影 「沖縄文化の遺宝」より

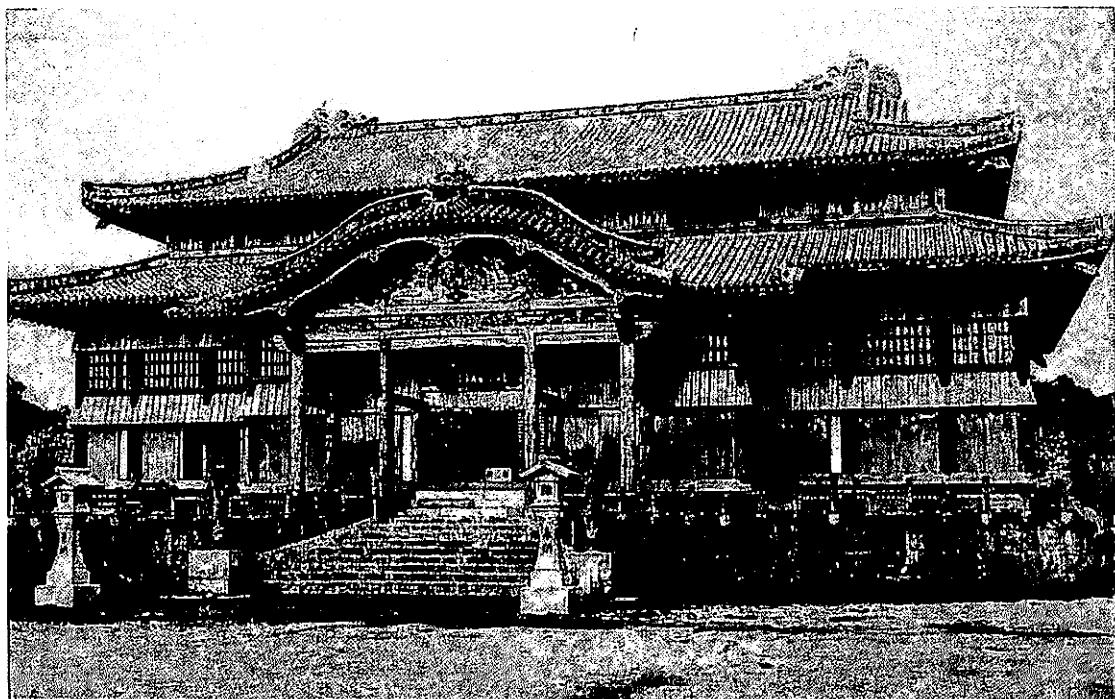
上記のものとは、屋根の龍頭棟飾りだけが変わる。



写真④ 平成3年首里城正殿復元工事中に届けられた写真。
大龍柱の姿が完全な形で正面に向いている。窓ガラス、袴姿
の師範学校の生徒？ 洋傘の婦人、見学している人々……。



写真⑤ 「琉球建築」・「琉球遺宝史」とも同一の写真。
昭和の解体復元後の写真。沖縄神社拝殿としての様子が、灯
籠・賽銭箱でもうかがえる。大龍柱は向かい合う。



写真⑥ 昭和10年頃 復元修理後の写真「写真集 沖縄」より
窓ガラスのようなものは無く、向かい合う大龍柱の斜め横には、
灯籠があり、階段上には、賽錢箱のようなものがある。



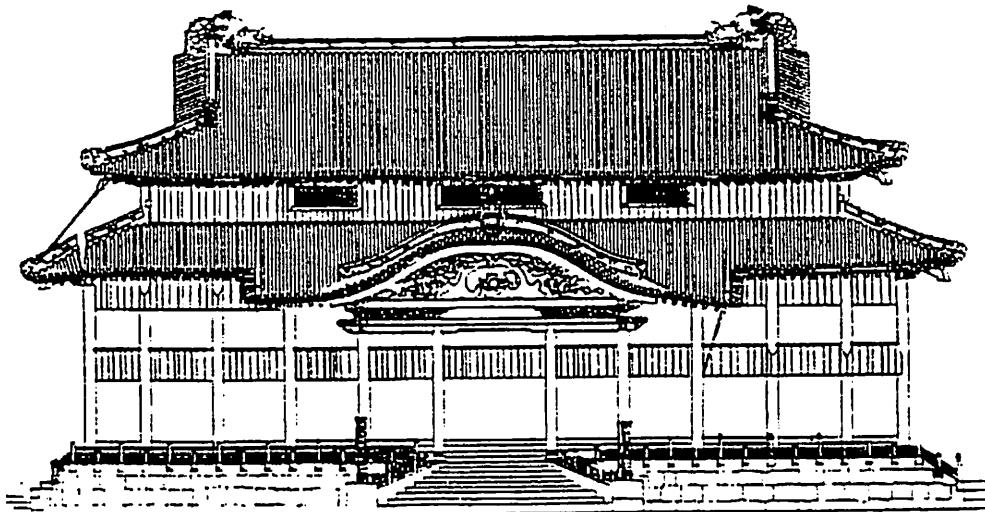
写真⑦
「坂本万七遺作写真集 沖縄・昭和10年代」より
大龍柱が向かい合う。阿形、後面からの
写真。後面の巻き付け部分は、実際は右
側面に当たる。
(首里城正殿予備設計報告書参照)

◎図面

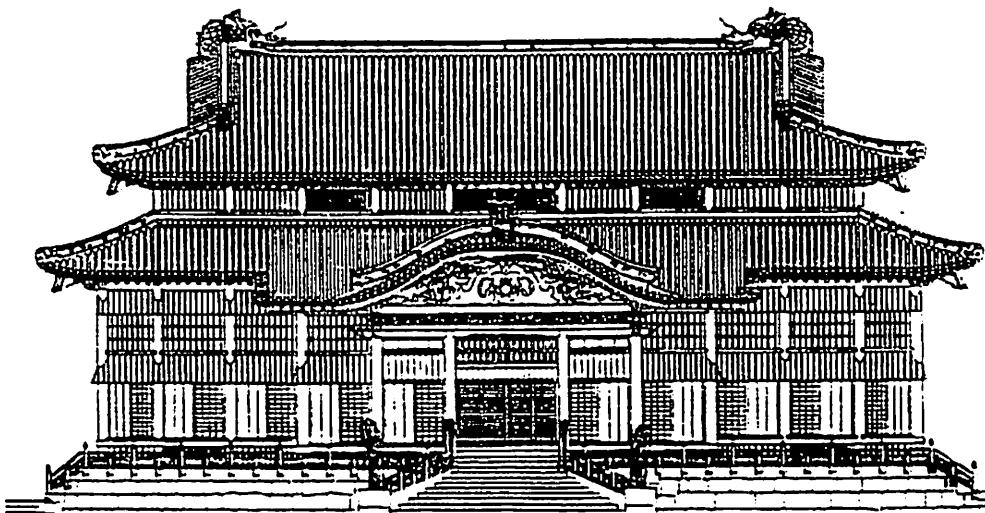
『国宝建造物沖縄神社拝殿図』^②（以下「拝殿図」という） 文化庁蔵 1933年（昭和8年）頃

修理前の図面（図面①）は、大龍柱が正面向き。

修理後の図面（図面②）は、大龍柱が向かい合う。



図面① 修理前の図面は、大龍柱が正面向き。



図面② 修理後の図面は、大龍柱が向かい合う。

◎木版画

レベルテガット航海記 ジョン・ヘイ提督が琉球を訪れたのは1877年（明治10年）

この木版画（木版画①）は、写真をレベルテガット、下絵がブイヤール、版画はコールによって制作されている。写真を基にして下絵を描き、版画にしているので、1877年（尚泰30年）の正殿が正しく表されていると思われる。大龍柱の向きは正面である。

——青い目が見た「大琉球」^⑬より——



木版画① 青い目が見た「大琉球」より

写真を基に木版画にしているのであれば、大龍柱の正
面向きは信頼性がある。小龍柱が無く、北殿の向きは
1877年（尚泰30）のものであるのか？
正殿降棟の獅子も描かれていない。

以上が主な資料である。写真原版は転写して広く用いられている。絵図においては幾つかの種類に分かれており、描き方に工夫されているものもあるが、同じ傾向の描き方に止まっているものが多い。

四、現在設置されている大龍柱の向きについての経過

首里城正殿実施設計委員会では、「寸法記」の絵図（絵図②）が古い資料として取り上げられ、昭和修理後の写真（写真⑤⑥⑦）や「拝殿図」（図面②）と「寸法記」の絵図との比較に比重がおかれた。筆者も彫刻の立場から意見を求められた。明治末から大正11年（1922年、写真②）、13年（1924年、写真③）に撮影された写真は、いずれも胴体中央部がなく、正面に向かっている。「寸法記」の絵図や他の絵図は胴体中央部が無くなつた状態ではなく、全容がわかり、当時の様子を留めている印象を受ける。青い目が見た「大琉球」の中の木版画は、正面向きの大龍柱の全容がわかるが、小龍柱は無く、勾欄等がはっきりしない事もあって参考までに止めた。この様にどの資料も決定的といえず判断に困ったのであるが、当時は大龍柱の復元（縮尺）に関わっていた事もあって、頭部を側面から見た場合精悍な表情が強められている事を述べ、龍の側面性を強調し、向かい合うかたちに賛同した。

五、正面向きの考察

大龍柱を正面向きとして位置付ける理由を以下に述べる。

1. 復元工事中に入手した一葉の写真（写真④）。

この写真は、実施設計委員会が首里城について検討していた時期には無く、復元工事に入つてから出てきた写真である。大龍柱の胴体中央部が無い状態でつながれた龍柱ではなく、全容を知る事ができる唯一確実な資料である。

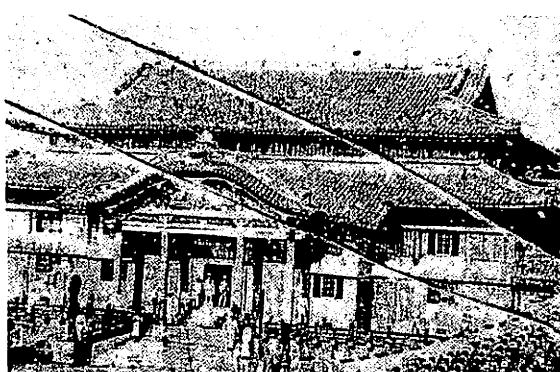
小龍柱があり、向かって右側の阿形の頭部は、鼻、唇の先端が欠落してはいない。唐破風の妻飾りや透彫等が、西日に照らされて影をつくっている様子から、形が保たれている状態がわかる。

熊本鎮台分遣隊が兵舎として使用したのは、1879年（明治12年）から1896年（明治29年）までである。龍の胴体部が切断されたのは、明治29年という説がある。冒頭にも述べたように

「…一個の龍の胴体が切断されたが、この憲兵隊長の急死のため、移送は行われず残り、…」とあり、また一方、「憲兵隊長の郷里に持ち帰って、後に元に戻された」という説もあって、どちらが確かなのか判断に困るし、それによって事情も変わってくると思われる。この写真では、大龍柱は正面向きに建っていて、龍柱の全容が分かる。「切断されて、両方の長さの均等を得るために完全な龍も切断した。」という場合、この写真では該当しない。

この写真の白い服装の人物は、写真⑨の歓会門に立っている人物とは雰囲気が違う。一見、セーラー服姿の水兵に見えるが、襟や帽子の日覆から水兵ではなく、窓際や勾欄に座ったり、大龍柱の側に立っていたりしている様子から、他からきた見学者ではないかと見られる。鎮台兵であれば、短剣を帯びゲートルを巻いていたと考えられ、また袴姿の男性は、師範学校で剣道をする生徒の姿とする見方もある。ガラス窓は、1898年（明治31年）に沖縄県土地整理局として改装した時に造られたものという見方もあり、洋傘を差している婦人がいる等、兵舎として使用された時期ではないのではという考えも成り立つが、関連写真として出てきた対の写真（写真⑨）から判断すると簡単に断定する事はできない。写真⑧の撮影角度は、正殿の向かって右側にある黄金御殿や南殿の屋根が見える状態から、番所或いは君誇の位置から撮影されている様に見える事からも、熊本鎮台分遣歩兵隊が駐屯していた時期とも考えられる。写真⑨の歓会門に立つ人物は、ゲートルを巻き剣を右肩に掛けている姿から門衛とも考えられ、またその脇に門衛舎の様なものがあることや、門の右脇の看板に「熊本鎮台…」の文字が読み取れるし、その隣にはガス灯の様なものもある事等から熊本鎮台歩兵隊が駐屯した時期と推測できる。それによって明治29年に龍の胴体部が切断されたという説は、どの様に判断されるか。

1927年（昭和2年）発行の「アトリエ」には、比嘉朝健による「琉球の石彫刻龍柱」の論文が掲載され、「大龍柱の一方は、二つの石を彫ってつながれており、もう一方は、三つの石でつながっていた。」という内容となっている。



写真⑧ 伊藤勝一資料から 首城正殿

向かって右側にわずかに黄金御殿、廊下、南殿が見える。写真④はこの写真から、唐破風、大龍柱付近を拡大したものである。



写真⑨ 伊藤勝一資料から 歓会門

門衛舎、門衛、「熊本鎮台兵……」の看板、ガス灯、写真⑧との一連の写真といわれる。獅子は正面向きである。

この論文から推測すると、胴体部が切断されたのではなく、継ぎ目から外されたという考えも成り立つ。だとすれば龍柱の下部、巻き付け箇所は固定されて動かされていない事が証明される訳であり、胴体部が無い明治末撮影の龍柱につながり、正面向きはそのまま受け継がれている事になる。写真④の大龍柱・阿形には、下部巻き付け部分が白っぽく写っている箇所があるため、熊本鎮台歩兵隊が動かした後の状況とも見られ、その時に向かい合っていた大龍柱を正面に向けたという考えをもつ者もいるが、大龍柱・吽形の下部巻き付け部分には、その面影は感じられない。また、白く見えるのは、新しく造り直されたとぐろの巻き付け部分ではという考えは、鎌倉芳太郎撮影の大龍柱写真と比較して検討しても考えられない。その写真では、巻き付け部分が阿形は吽形より短くなっている（写真⑫）、継ぎ目の補強の仕方から見ても阿形が（吽形の正面には穴をあけた補強はされていない）かなりいじられた痕跡が見られ、切断された面影を止めるといえる。この事は、胴体中央部がいきなり大きく無くなるという事は考えられないため、熊本鎮台兵の隊長による切断ではなく、元に戻された一個の龍柱がその後も徐々に継ぎ目から欠けていき、やむおえず他方

の龍柱も短くされたと推測する。よって明治末頃の状態に胴体中央部が無くなっていくと考える。

2. 胴体中央部の無い大龍柱の推移と撮影の時期では、明治末撮影とされる「写真集 沖縄」（写真①）によれば、当時胴体が切断されていた事がわかるが、復元工事中に入手した一葉の写真との関連はどの様に判断されるか。この写真が明治31年（1898年）頃とすると明治29年（1896年）の鎮台分遣隊の憲兵隊長による「一個の龍の胴体切断」は、後に元に戻して取り付けられ、大龍柱の向きには変更が無かった事になる。復元工事中に入手した写真（写真④）は正面向きであるし、明治末撮影（写真①）も正面向きである。その後、鎌倉芳太郎によって調査され、大正11年（1922年、写真②）、13年（1924年、写真③）に撮影された龍柱は、胴体中央部が無い正面向きの写真（「沖縄文化の遺宝」）が、当時の様子を伝える。昭和2年（1927年）から8年（1933年）にかけての解体修理には、当時文部省技官であった森政三が深くかかわり、数多くの写真や図面を残している。大正13年に沖縄神社拝殿となった首里城正殿は、昭和の解体復元工事にともなって新装の

拝殿となる。森政三の「写真集 沖縄」には、大龍柱の向きについて「向きも明治の廃藩置県以後正面を向いていたのが、解体修理を受けた際向き合って建てられた。(11ページ)」^⑥とあり、はっきりと向きを変えた事が述べられてい

る。大龍柱の向かい合う写真はこのころからと見受けられる(復元修理後の写真「写真集 沖縄」昭和10年頃)。また、昭和9年(1934年)、10年(1935年)に調査に来た田辺泰の写真でも、大龍柱は向き合うかたちであり、昭和14年

・解明されていない龍の下部巻き付け部分と勾欄のほぞ穴について

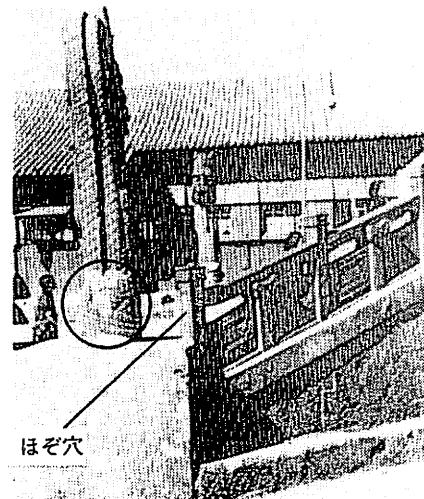
写真⑦

坂本万七造作写真集「沖縄・昭和10年代」より

向かい合う大龍柱。

大龍柱・阿形後面写真を見ると、下部巻き付け部分の取り付け方を間違えている。この箇所は、右側面にあたる。

勾欄の柱の正面にはほぞ穴があり、セメントのようなもので埋められている。



写真⑩ 田辺泰著『「琉球建築」写真16』より

向かい合う大龍柱。吽形である。
下部巻き付け部分と胴体部の取り付け
る面が間違っている。



写真⑪ 田辺泰著『「琉球建築」写真15』より

向かい合う大龍柱。阿形である。
下部巻き付け部分に胴体部の鱗が斜め
に走り、巻き付け部分にくいこみ曖昧
になっている。

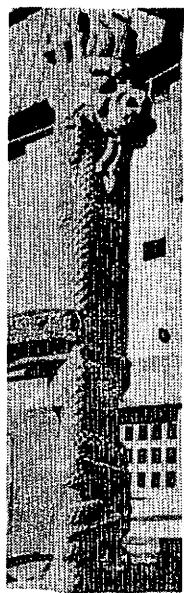
(1939年)、16年(1941年)に来沖し撮影した坂本万七造作写真集「沖縄・昭和10年代」も、向かい合う龍柱である。胴体部を無くした大龍柱は、下部の巻き付け部分が1/4回転ずらした状態で据え付けられ、坂本万七の阿形の後面写真(写真⑦)の下部巻き付け部分は、本来は右

側面に当たる箇所である。田辺泰の「琉球建築」にある写真の拡大写真(写真⑩、⑪)も、胴体中央部の継ぎ目が大分修正されていて、胴体の鱗の流れを見ると、とぐろの巻き付け部分の鱗に食い込みがあり、形態をおかしくしている。

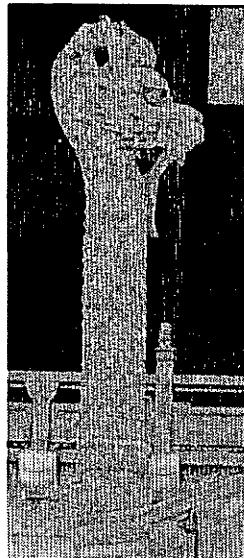


写真⑦、写真⑫の大龍柱の横、後方にある勾欄の「ほぞ穴」が中途半端な感じを与える。特に写真⑦の阿形後面写真の台座と勾欄との兼ね合いは不自然であり、造形的にもマッチしない。台座は後補のものと推測する。

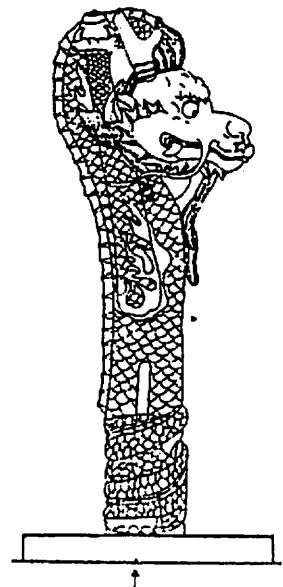
・尾の先端の位置付け



田辺泰著
「琉球建築」より
小龍柱・吽形
大龍柱と同じ形
態をとっている。



平成に復元された
大龍柱・吽形



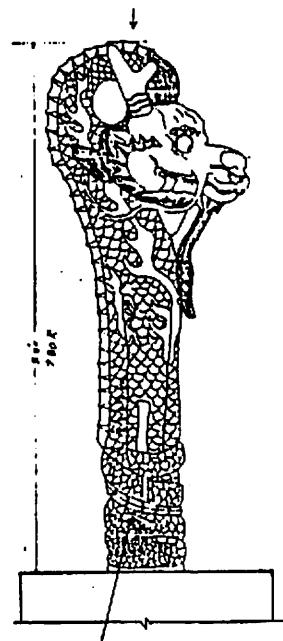
拝殿図より 大龍柱・吽形
前脚の上下の位置付けが図
のようであれば、下図では
顔面の向きは逆にならなけ
ればならない。



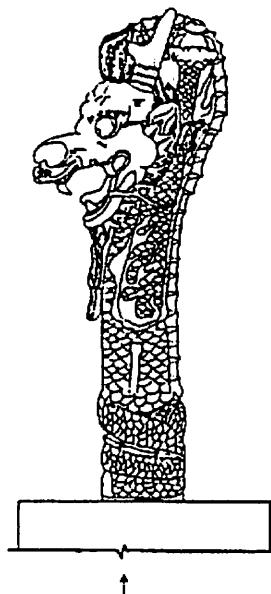
尾の先端が正面に
位置付けられるの
が、本来の形状で
ある。

ほぞ穴—

鎌倉芳太郎著
「沖縄文化の遺宝」より 大龍柱・吽形



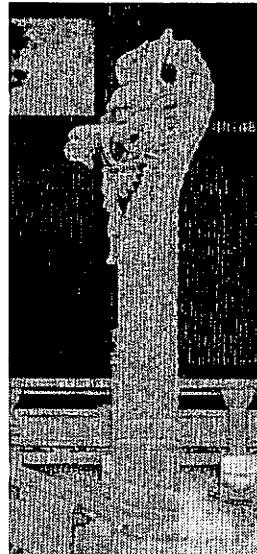
尾の先端が側面に位
置付けられている。



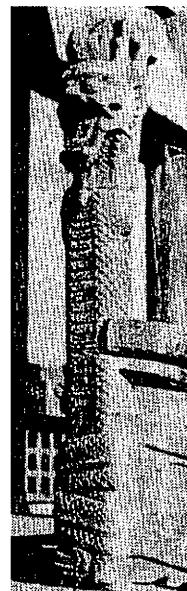
拝殿図の阿形側面像であるが、顔面は同一方向を向いているにもかかわらず、前脚の位置付けが曖昧である。



拝殿図より 尾の先端が側面に位置付けられている。



平成に復元された
大龍柱・阿形



田辺泰著
「琉球建築」より
小龍柱・阿形
大龍柱と同じ形態をとっている。



大龍柱・阿形

鎌倉芳太郎著
「沖縄文化の遺宝」より

この様に昭和の解体復元工事に伴う大龍柱の設置では、下部のとぐろの巻き付け部分と胴体との取り付け方の調査が十分行われなかつた事が分かる。鎌倉芳太郎の大龍柱の正面向きの写真（写真⑫）では、下部の巻き付け部分にある龍の尾の先端が、正面に位置づけられており（小龍柱も同じ形態を取っている。首里城正殿予備設計報告書「首里城正殿大龍柱・縮尺1/5復元経過について」参照）、昭和の復元修理時に判断を間違つたと思われるし、「向き」もあえて向かい合わせたのは、何を根拠にしたのか今後の課題である（尾の先端位置付け参照）。

森政三の「向きも明治の廃藩置県以後正面をむいていたが、…」という文に、廃藩置県以前は向かい合つていたのではという疑問もある。しかし熊本鎮台分遣隊による向きの変更には触れられてない。あれほど鎮台兵のことが語り草になつていながら、あえて廃藩置県のことを述べているのは一つの区切りとして、明治以後の沖縄県としての位置付けからきたのではと考えられ、大龍柱の向きは変更が無かったと推測する。

3. 木版画（木版画①）が制作されたのは、1877年（尚泰王30年・明治10年）であり、レベルテガットによって写真を撮つたものをブイヤールが下絵に描き、版画をコールが彫つたと推測すると、写真は当時の情景を捉えているので、大龍柱の大きさや正面向きだった事の確認がとれる。この版画には写真から転写する段階で主要な部分（正殿）に重点が置かれ、北殿等は、なんらかの理由で写し間違えたという想定はできないか。あの当時これほど正殿を描写できると言う事は、よほど詳しい資料があったためと考えられ、信憑性はある。

写真から版画に転写するときは、写真をなぞって写せば正確に形が捉えられる事ができるが、小さい写真から拡大したり、見て写す作業になると、その建築の特徴を理解していないと見落とす事もある。例えば、正殿の版画には右側の降棟（阿形の獅子）が描かれていない。

4. 絵図については、龍が向かい合う形で描かれている場合が多い。古い絵図については、古代エジプトの絵画や浮彫等に見られるように、横向きや斜め横向きの表現が多いが、これは古から描き難いものを描く時に共通して見られる要素である。描き方として、例えば魚を描くには、その姿が分かりやすいのは一般に横からであり、描くにもその方向からが描き易くなる。つまり印象しやすく表現もしやすいという手法をとっている。

「寸法記」の絵図は、その点で共通した描き方をとっていると考えられる。勾欄の獅子も同姿勢であり、大龍柱においては阿形の左前脚は宝珠を上にあげて握っているし、吽形は右前脚が宝珠を上にあげているのが本来の形状である（実物の龍柱がその形である）。この絵図は、阿形（左前脚）、吽形（右前脚）とも下に向けて構えている。従つて実際の形状とは逆になつてゐるが、その方が描きやすく分かりやすい。これが事実通り描くとした場合、龍の頭部・頸から頸にかけての曲っている部分に宝珠を描くので、かなり込みいいた図になる。この様な事例からみて、絵図からは向きや細部の形状、部位の特徴はつかみ難い事がわかる（「寸法記」の絵図と平成の復元像との比較参照）。

「首里旧城の図」（仲宗根真補筆、絵図④）は、明治27年（1894年）に制作したもので首里城正殿を鳥瞰図的に描いた絵であるが、歓会門の右脇に「沖縄分遣歩兵隊」の看板が掲げられている。またその脇には、一対の獅子があるが、向かい合うかたちをとつてゐる。本来は正面向きの獅子であり、横向きであるのは「描きやすい方向から描く」事の表れであり、大龍柱も獅子と同じ方法で描かれたのではないかという考えも成り立つ。この事は、同時期とも考えられる熊本鎮台分遣歩兵隊の駐屯時の写真にもはっきりと大龍柱が正面向きに写つておらず、また歓会門の左右の獅子像も正面向きに写つてゐる事からも推測できる。この事によつても絵図の描き方は、描きやすい方位をとつてゐるという事になる。しかし、「首里城鳥瞰図」（絵図⑤）での歓会門の獅子は、正面向きに描かれており、大龍柱は見方によつては正面向きに

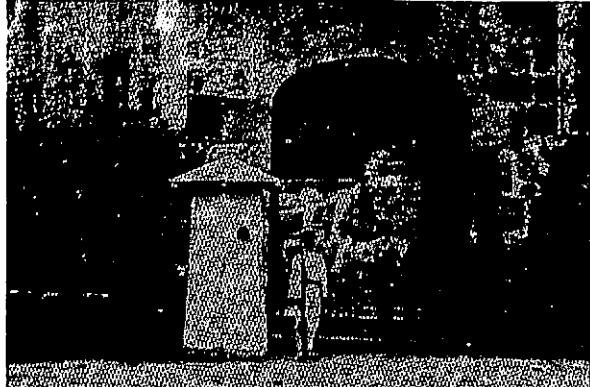
見える。この絵図だけは例外と考られるが、他の絵図は共通して横向に描かれている。またこの絵図では、大龍柱に大きな台石は無く勾欄と

一体化している。また歓会門の左右の獅子が正面向きであるし、門衛舎も無く、「熊本鎮台…」の看板も掲げられていない事から、かなり古い絵図だと推測できる。



絵図④-2 「首里城旧城の図」 仲宗根真補筆
(明治27年) より、歓会門の部分拡大

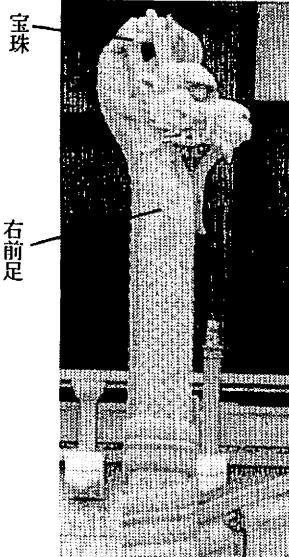
門衛舎、「沖縄分遣歩兵隊」の看板、ガス灯があり、獅子は横向きに描かれている。



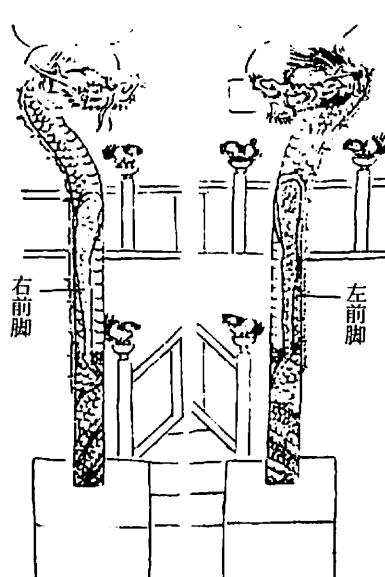
伊藤勝一資料より、歓会門の写真⑨から部分拡大。

門衛舎、門衛、「熊本鎮台…」看板、ガス灯の配置。左の絵図④-2と同時期の写真とみる。獅子は正面向きである。

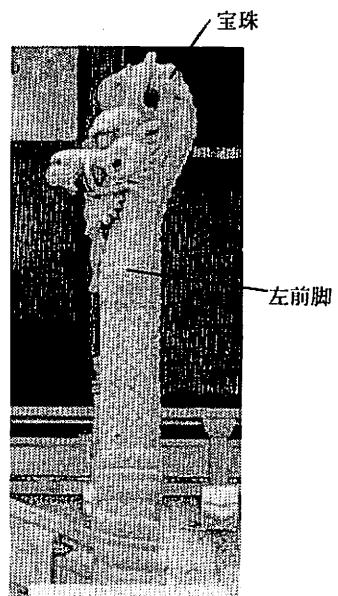
・「寸法記」の絵図と平成の復元像との比較



平成の復元
大龍柱・吽形



「寸法記」より



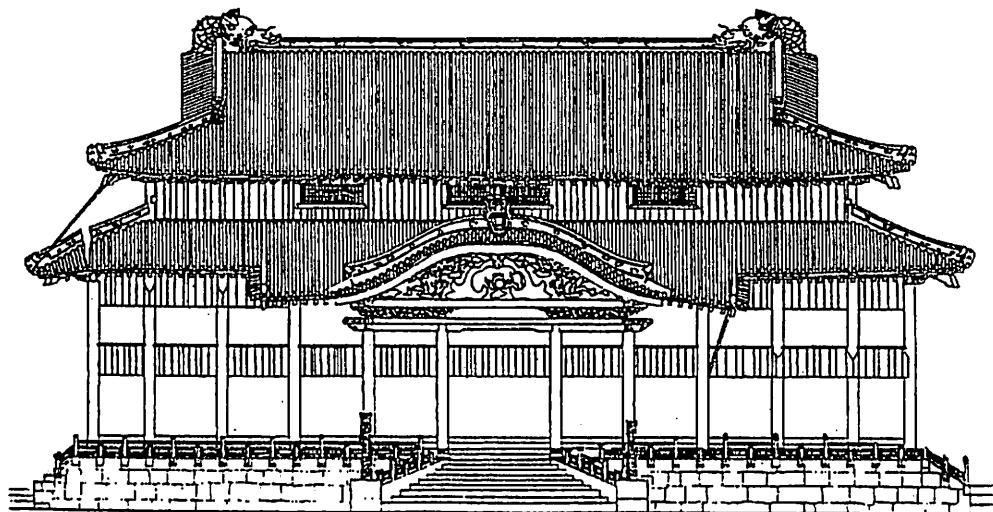
平成の復元
大龍柱・阿形

龍の前脚を絵図では下に構えさせている。

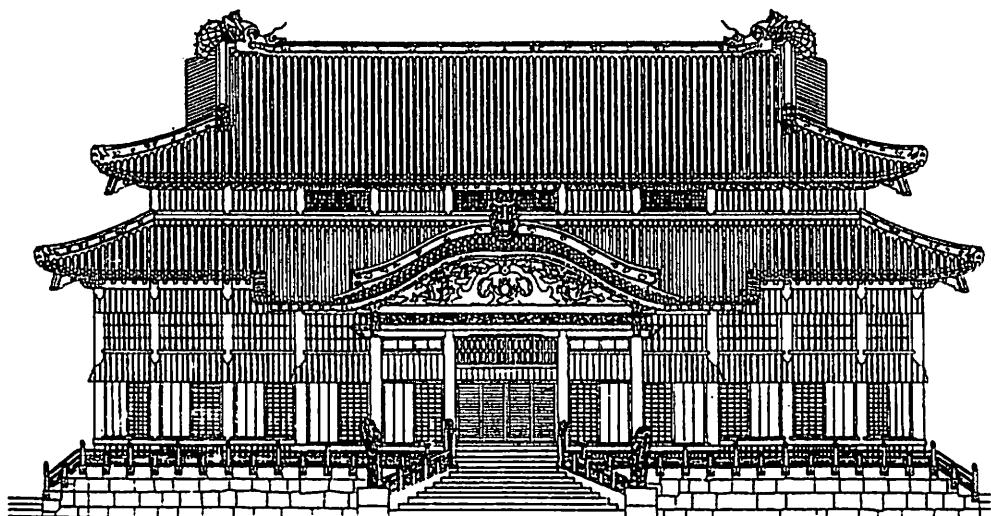
5. 図面（国宝建造物沖縄神社拝殿図）

昭和解体修理前の実測図面では、壊れて落ちそうになっている向かって左側の棟（隅棟）を吊っている状態と、唐破風右側の傾斜している

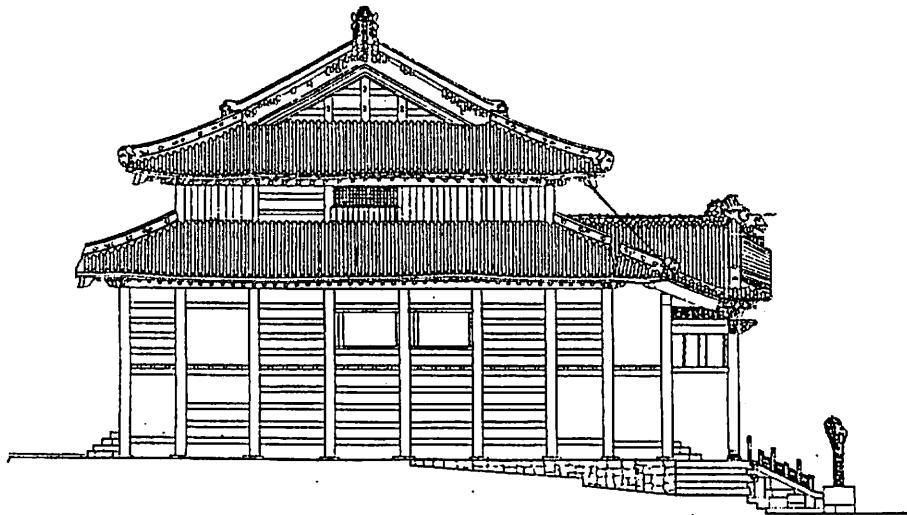
軒を棒で支えて補強している状態を図面にしている。ここでも大龍柱は、正面向きであり、小龍柱は無い。修理後の図面には、小龍柱もあり、大龍柱は向かい合う形をとっている。



昭和解体修理前の実測図面より

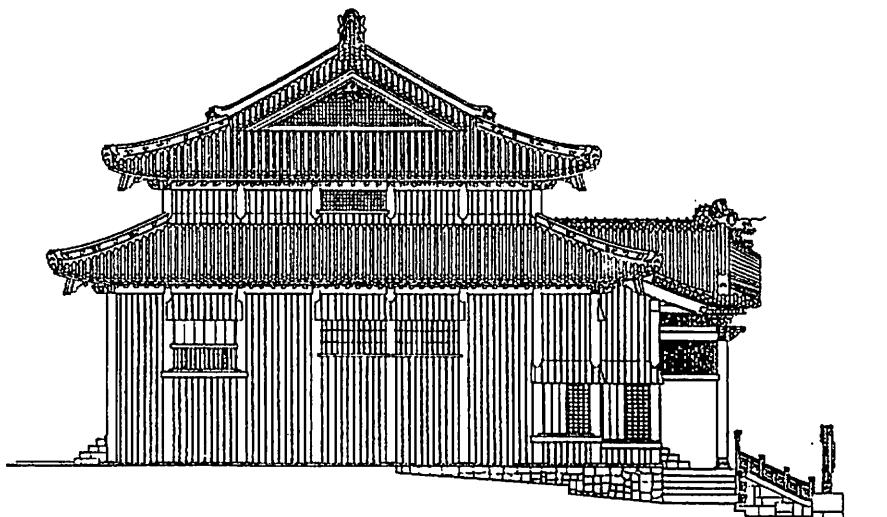


修理後の図面



図面①- 1、修理前の図面。側面

図面①- 1、図面②- 1、の建物側面全体図を見ると、正面を向いた唐破風龍頭と、同じく大龍柱は自然に見え、しかも造形的である。



図面②- 1 修理後の図面。側面

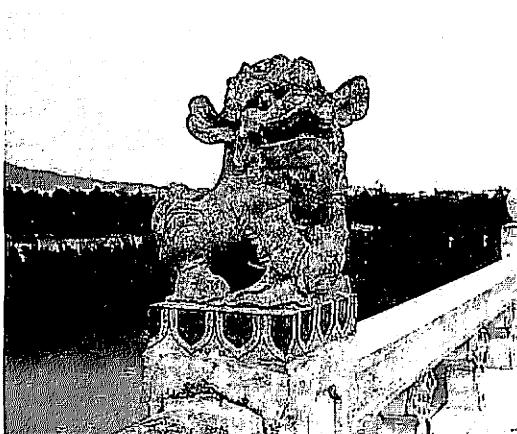
以上の事例から、首里城正殿の大龍柱は正面向きだという事が、立証できる。また、熊本鎮台歩兵隊の隊長によって「一個の龍の胴体が切断されたが…」云々で、龍柱が元に戻される時、向かい合っていたものを正面に変えたという説は考えられない。それは 1877 年（明治 10 年）の版画（木

版画①）や 1894 年（明治 27 年）の仲宗根真補筆「首里旧城の図」（絵図④）、またこの図と同時期と見られる熊本鎮台分遣歩兵隊駐屯時の写真（写真⑨）の状況（歓会門の門衛舎や「熊本鎮台…」の看板、その脇のガス灯が共通する）から証明でき、向きを変えられたという事は成り立たない。

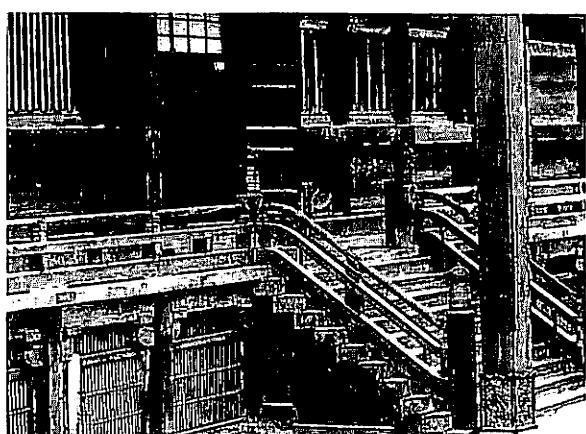
六、石造勾欄と龍柱との関係

首里城正殿の正面性を強調するものに、末広がありの階段がある。中国の紫禁城や日本の神社仏閣では、階段の勾欄（欄干）は左右平行に造られている。また、中国の石造勾欄には獅子を配した親柱が多く見受けられ、日本では擬宝珠がつけられている例が多い。正殿の石造勾欄は中国的様式を

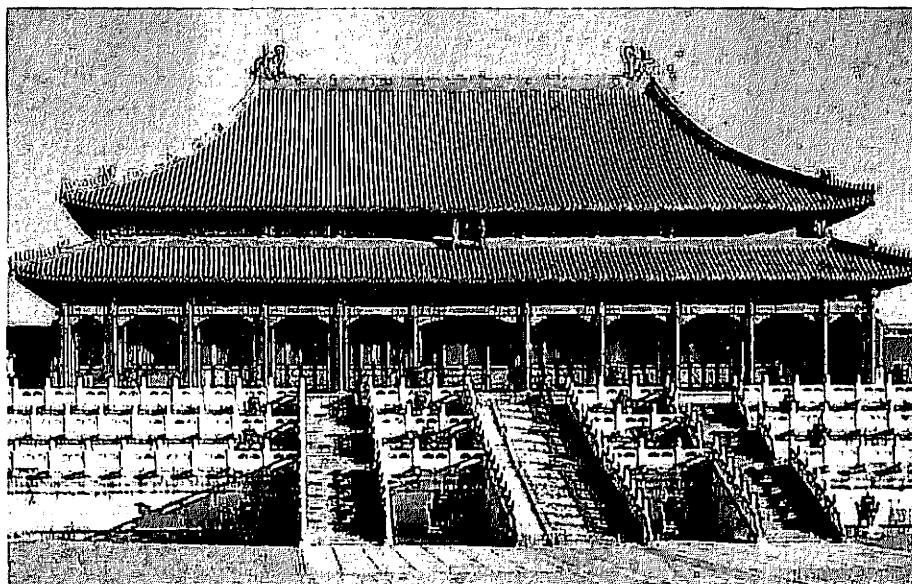
取り入れて獅子を配し、正面の勾欄の親柱として龍柱を阿形、吽形の対で組み合わせている。龍柱は龍がとぐろを巻き鎌首を構えている形態を柱に見立てた形で表し、首里城正殿に独自の風格をつくっている。このように考えると、龍柱は単独に建っていたものではなく、勾欄に組み合わせる様に造形的に工夫されていたものと推察される。



中国 勾欄に獅子



日本 勾欄に擬宝珠



中国 紫禁城の太和殿

大龍柱は、「寸法記」の絵図を始め、明治、大正、昭和に撮影された写真全てが、大きな琉球石灰岩の台石に建っている（「大龍柱の台座について」参照）。勾欄の構造や龍柱の配置からして、創建当初からの台座とは考えられない。鎌倉芳太郎の大龍柱の写真や坂本万七の写真集での大龍柱の阿形の後面写真にみられる勾欄のほぞ穴は、大龍柱が繋がっていた痕跡だと推測できる（「解明されていない龍の下部巻き付け部分と勾欄のほぞ穴について」参照）。また、「首里城 正殿前元仲秋宴設営絵図」（絵図①）、「首里城鳥瞰図」（絵図⑥）、「首里那覇港図」（絵図⑧）の勾欄部分では大龍柱が勾欄と一体となっており、大きな台座は無く、小龍柱同様に組み込まれた構造になっている。

首里城正殿実施設計委員会においても、筆者は「ほぞ穴」についてふれたのであるが、「寸法記」

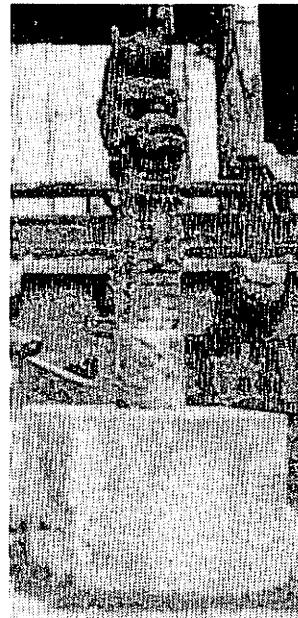
に重点が置かれ、古い記述として重要視されたため、取り上げられなかった。しかし「寸法記」は1768年（尚穆17年）に作成されてはいるが、「首里城関係資料集」^⑯に「6月9日、午を過ぐるの時、候大地震あり。王城の石垣数十カ所、…地震の壊す所となる。」とあり、また「6月26日、王殿修完するに因り、主上、大美御殿より新殿に遷る。」との記述もあるところから、「寸法記」は大地震後の作成と考えられる。また、1760年にも「大地震があり、首里城の石垣が57カ所損壊する」とある事からも、大龍柱は勾欄から外れて倒れた可能性があると考えられる。頭部の大きい大龍柱は、勾欄に繋ぐ箇所及び底面の取り付けが、地震の揺れに耐えられなかったのではと考える。また、乾隆24年（尚穆10年・1761年）に、田里里之子親雲上による「勅使様より龍樋に御建立の碑文の根

・大龍柱の台座について

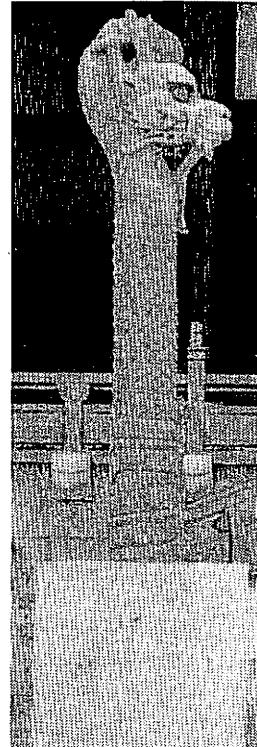
龍柱が縦に長いのに対して、台座の大きさは不釣合であり、勾欄と一体化するのが創建当初の形態と考える。



明治



明治末～大正



平成

西村：首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察

留ならびに百浦添真正面の龍柱修補等相調」の件が「恵姓家譜^⑯」の中に記述されている事から、「寸法記」作成以前に龍柱が修補されている事が分かり、台座及び勾欄との関係に何等かの影響があったとも考えられる。

これらの事と共に台石の有無に関係があると考えられるものに、正面階段の形がある。正面階段の勾欄が斜めに配置されている事は、間口を広く取り、奥行きを深く見せる効果を狙ったもので、首里城正殿を大きく見せるという独自性があると思われるが、後補とみられる大龍柱の大きな台石によって、斜めに配置された勾欄の効果が損なわれ、造形的にも合わない形になっている。

龍柱は、形態的に勾欄と繋がり構成されていると考えられ、勾欄を龍柱の後面に繋ぎ構成する形

を取る事によって方向性を示すと考えられる。よって、小龍柱は左右の勾欄から延長する構えで、向かい合う形になり、大龍柱は上から下に向かう形で構える事から、正面に向く事が推測できる。

首里城正殿の大棟龍頭棟飾りは、棟を噛むかたちで向かい合っている。左右の降棟の獅子は正面を向き、正面の唐破風の龍頭棟飾りは、棟そのものが龍の胴体として造られていて、鎌首を構えて威嚇する形をとつて正面に向かっている。玉座にあたる御差床の龍柱も、左右の勾欄との繋がりで小龍柱同様、向かい合う形をとつていて。大龍柱においては、小龍柱から繋がれた勾欄が上から下に向かい、しかも大龍柱が阿形、吽形の構えをとつて正面に向かうことにより正殿全体にリズム感を与える構成になる。

尚書王世代

乾隆二十二年丁丑十二月朔日為給地御藏大屋

子

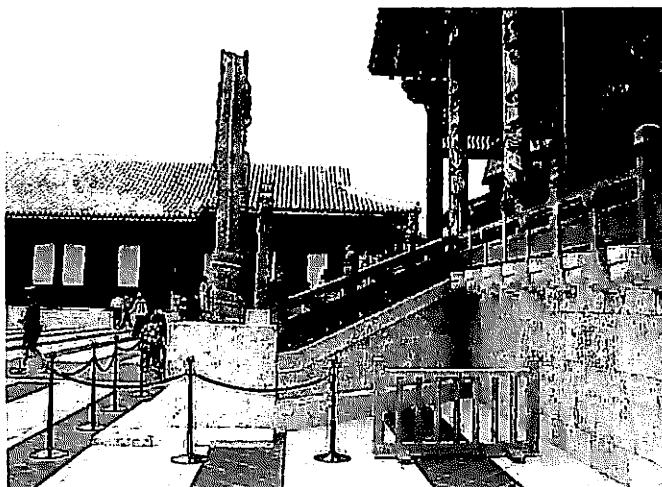
乾隆二十四年己卯三月十八日恭蒙賞賜上布三
尺原是文富始製造根礎磚塊合諸品作石續石補
淺並且諸品器物等幸蒙朝廷轉聞其事冊封欽使
欽使將賁臨之前奉憲令補足中山第一碑記及
百浦添龍柱等所壞之處堅留今般冊封欽使所
建雲根石題碑記之基根且造器物献聖上由是
蒙褒賞如此其緣由左記

上希之母
覽

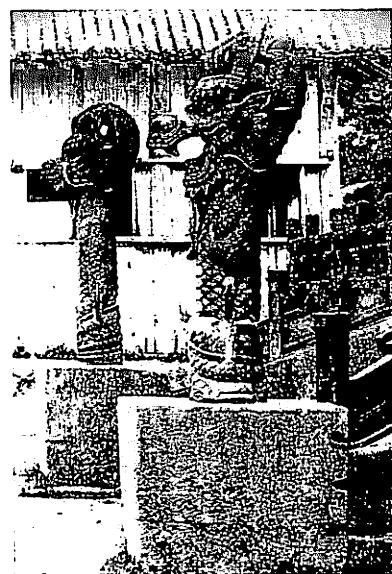
因國王之緣故
海王龍種中山第一大碑文相破以存。將被海
王所破相湖調查不中。所以不能在這事。而
是被海王所破也。因而在次被海王所破。所以
誠中廢。又傳補正。動使被海王龍種。修建立
之碑文被海王石像。海王真身。而之龍種。被海王所破
且自分道地。而歸海王。而之湖。海王傳聞
海王傳聞。而歸海王。而之湖。海王傳聞
海王傳聞。而歸海王。而之湖。海王傳聞

乾隆三十五年庚寅閏五月二十七日不祿享年五
十八號善因

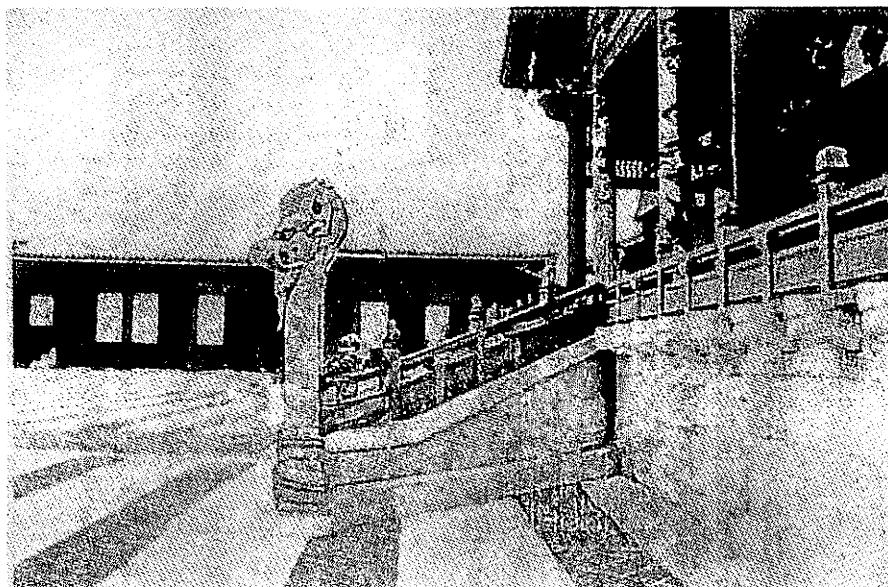
「東姓家譜」より



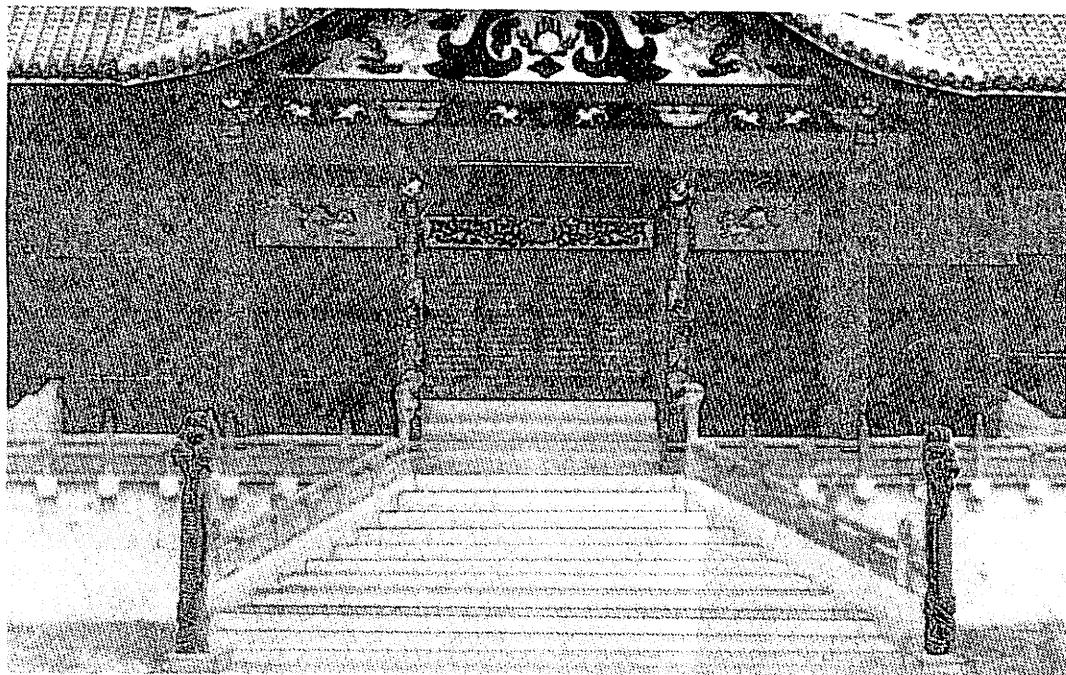
現在の階段側面



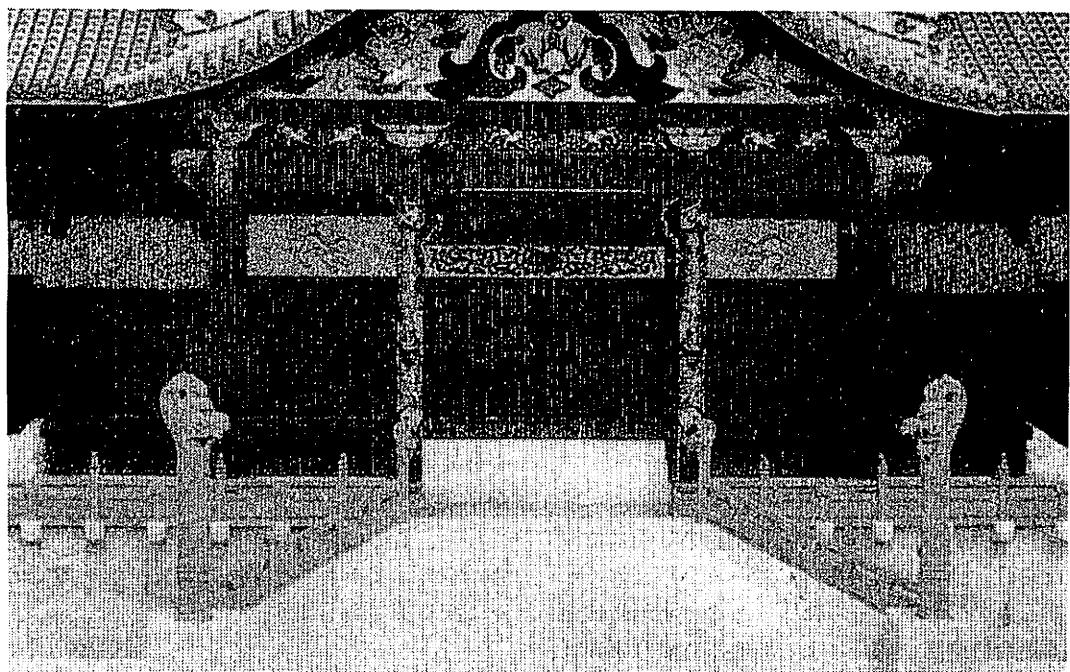
「沖縄文化の遺宝」より
正面向きの大龍柱。大きな台座と
勾欄が不釣合にみえる。



創建当初の龍柱及び勾欄を真横から想定してみた。正面階段は急勾配であり奥行が少ない。末広がりの階段を造っているのは首里城正殿を大きくみせる一つの工夫と考える。正面向きに構えている阿・吽形の大龍柱は、勾欄に組み込まれることによって構造的にも流れがスムーズにつながっていく。



今まで述べた事を総合して、創建当初の龍柱及び勾欄を想定してみた。この状態にすることによって、末広がりの階段、親柱としての龍柱と勾欄の関係が一体化すると考える。



現在設置されている大龍柱

日本の仏閣や神社（国宝建造物^⑯）では、寺の門の両脇に置く一对の金剛力士像や社の前に置かれた守護獣の像（獅子・狛犬）等の向きは、正面性をとっているのが一般的である。東大寺の金剛力士像は正面向きであり、厳島神社本社の狛犬は向かい合う形をとっているが、顔面は正面に向いている。東照宮陽明門の様に多数の彫刻が施されている建物でも、獅子や龍は正面に向かっている。

これらの建造物にあるものをまとめてみると、

- ・仁王像のように単独に置かれる場合は、正面向きである。
- ・獅子や龍の頭部等でも、木口や柱を背にして取り付けられているものは、正面向きである。
- ・そのものの周辺に関わる場合や欄間では、向かい合う形を取る。

しかし、神社に置かれる狛犬や狛の像には完全に向かい合う形をとるものもあり、昭和の解体修理工事の際、首里城を沖縄神社拝殿とするために、これらの事例を参考として大龍柱を向かい合わせ、しかも単独に置かれる阿形、吽形の像としての位置付けをしたのではと推測する。

昭和解体修理の際は、

- ・大龍柱の形態が解明されていない（下部の巻き付け部分のつなぎに誤りがある）。
- ・大龍柱の後方にある勾欄の「ほぞ穴」について解明されていない。
- ・大龍柱を、単独に存在させる狛犬や狛の像と同様に位置付けている。

以上の点から考えても、昭和解体修理の際には大龍柱の向きが十分検討されていたとはいえないと考えられる。首里城正殿の龍柱は、勾欄に組み込まれ、取り付けの方向性が重要視されていたと考えられ、正面向きが本来の姿とみる。

七、むすび

龍柱については、首里城正殿正面の階段に位置付けられ、独特の様相を持っているため、古くから観る者の関心をそそった様である。明治時代の熊本鎮台分遣隊の隊長による龍柱持ち帰り事件は、まさにその代表的な事例であり、また、向きについても昭和解体修理後に大龍柱が向かい合ってい

る写真を見た比嘉春潮^⑰が、伊東忠太にその事を話したところ「それは誤りだ。修復を監督した役人に話そう」と言った等、その後の龍柱にまつわる話は後をたたない。だが、話題にはなっても龍柱の形態については、理解されていなかったようである。素晴らしいという表現はあっても、どの様に良いのかは記録に無い。筆者も復元に携わって初めて形態を知ったのである。柱に螺旋状に巻き付く龍や瑞雲の中の龍、曲がりくねる龍は一般的である。何故とぐろを巻き、鎌首を持ち上げて威嚇する構えを柱に見立てたのか、身近にいるハブの生態を観察して龍とむすびつけたのか、そこに独創的な発想があったと思われる。胴体が柱であり、鎌首やとぐろ、前脚の位置付けはよく観察しないと気付かない。それだけ柱としての形態を作り上げているのである。また石という素材を組み合わせた勾欄との兼ね合いから、親柱としての位置付けの発想とも考えられる。

創建当初の英知の結集が、龍柱・勾欄の形態として優れた考案をした。古老達は首里城の位置や方角は、風水の思想を取り入れていると同時に、仏法の心を合せ持っており、また、龍柱の向きは、正面を向くかたちを取った場合は、威嚇或いは衛兵を意味し、向かい合うかたちを取った時には、許される事につながると言い、首里城正殿の大龍柱は、正面を向く事が正しいと強調する。

首里城正殿の龍柱は、創建当初の発想に鑑みて造り上げる事に重要な意味がある。柱に見立てた龍柱は、勾欄に組み込まれ、門の構えとして工夫された造形である。小龍柱は左右に組まれた勾欄から延長した構えであり、大龍柱は上から下に組まれる勾欄に繋がって構える門衛像である。

王朝時代の先人達は、豊かな知性と感性を持ち、諸外国との交易で影響を受けて昇華した造形美を造り上げてきた。調査研究されてきた写真や図面を最大限に活かし、それを基に正しく復元する事が平成の復元といえる。

なお、この拙論を著すに当たり、助言や示唆、資料を与えて下さった新城栄徳氏を始め多くの方々に深く感謝致します。

参考文献

- ① 「首里城正殿実施設計(彫刻)報告書」 西村 貞雄著 1990年(平成2年)3月 沖縄総合事務局国営沖縄記念公園公園事務所
- ② 『首里城正殿予備設計報告書「首里城正殿大龍柱(縮尺1/5)復元経過について』 西村 貞雄著 1988年(昭和63年)3月 沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所
- ③ 「沖縄文化の遺宝」鎌倉芳太郎著 1982年(昭和57年)10月 岩波書店 P23, P35, P36, P38, P40, P44
- ④ 「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」 1768年(乾隆33年)沖縄県立芸術大学蔵
- ⑤ 「首里那覇港図」(八曲屏風)筆者不詳 19世紀 沖縄県立博物館
- ⑥ 「首里旧城の図」仲宗根真補筆 1894年(明治27年) 沖縄県立博物館蔵
- ⑦ 『重要歴史資料調査報告書Ⅱ「県内絵画遺品調査報告書』P97, P99 1977年(昭和52年)3月 沖縄県教育委員会
- ⑧ 「写真集 沖縄」1984年(昭和59年)9月 P31, P32 那覇出版社
- ⑨ 「琉球建築」田辺泰著 1972年(昭和47年)10月 P14 座右宝刊行会
- ⑩ 「琉球造宝史」1972年(昭和47年)5月 成章館
- ⑪ 「坂本万七遺作写真集 沖縄・昭和10代」 1982年(昭和57年)2月 P9 新星図書出版
- ⑫ 「国宝建造物沖縄神社拝殿図」 1933年(昭和8年)頃 文化庁蔵
- ⑬ 青い目が見た「大琉球」ラブ・オーシュリ／上原正稔編著 照屋善彦監修 1987年(昭和62年)P209 ニライ社
- ⑭ 「「熊本鎮台分遣隊駐屯時の写真」 伊藤勝一 資料 沖縄県立図書館蔵
- ⑮ 「首里城関係資料集」 1987年(昭和62年)3月 P14, P15, P16 沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部
- ⑯ 「恵姓家譜」 明治4～明治12年 保管者田里友信 那覇市文化振興課蔵
- ⑰ 「文化庁監修 国宝 建造物」 1984年(昭和59年)12月 毎日新聞社
- ⑱ 「比嘉春潮全集 第五巻 首里城正殿の龍柱」 1971年(昭和46年) 沖縄タイムス社
- ⑲ 「文化財用語辞典」 1976年(昭和51年)11月 京都府文化財保護基金編集 第一法規出版株式会社
- ⑳ 「アトリエ」 第四巻 第三号「琉球の石彫刻龍柱」 比嘉朝健著 1927年(昭和2年)